

アクリティカ歌謡

## アンドロニコスの息子

橘 孝司 訳

サラセン人が襲来し、アラビア人が襲来する。  
アンドロニコスを襲撃し、愛しい夫人を奪い去る、  
身籠りて九ヶ月、子を産もうとするその時に。

獄舎の中で愛児を産み、鉄鎖のまま育てあげる。

母はパンと乳を与え、

母は我が子に向かい「我が子、アンドロニコスの子よ」

奥方はその子に向かい「我が子、太守の子よ。」

初めの歳に剣を持ち、二歳になれば槍を手に、  
三年過ぎれば、はや見事な若武者。

外に出ればその名は高まり、何人なんびとだろうと恐れぬ、  
たとえペトロス・フォカスに二ヶフォロス、

大地と世を震わせるペトロトラケロスだろうとも。

「正義の戦きであれば、コンスタンティノスをも恐れぬ。」  
黒馬引き出しこれに乗り、  
拍車くれて、平野へ降り行く。  
二五

そこで目にするのはサラセン人たち、馬跳びを競うその姿。

「そんな腕試しなら女でも跳ぶ、

孕まぬ者ではなく、身重の者の戯れごと。

君らの馬が九頭、我のを加えて十頭並べよ。  
二〇

我を後ろ手に縛り上げ、重ねた鎖を三重にかけよ。

「我が目を縫え、重ねた縫糸で三重に。」

我が脇に五十貫の鉛を掛けよ。

両足には鉄の枷かぎを二重に填めよ。

見るがよい、ローマの若武者の跳ぶさまを。」  
二五

彼らは後ろ手に縛り上げ、重ねた鎖を三重にかける。

脇には五十貫の鉛を掛け、

両足には鉄の枷を二重に填める。

そうしておいて、彼に向かつてサラセン人たちは、

「愚かな小わつばめが、自由に動いてみるがいい。」  
三〇

「少し目を開けると、縫糸は破れ、

手を振るうと、鎖は切れた。

脇を揺ると、鉛は落ち、

二度跳び上がると、枷は外れた。」

九頭の黒馬を飛び越え自らの馬に乗り、  
拍車くれて、山に駆け上がる。

(三五)

母は窓ごしに彼に言った。

「息子よ、父のもとに行くのなら、母の言葉を聞くがよい。

全ての天幕は赤色、父の天幕のみ黒い色。

三度の誓いを聞くまでは、馬から降りてはなりません。」

かくして母が語ったその言葉のとおり、  
(四二)

全ての天幕は赤色、父の天幕のみ黒い色。

天幕を三度回れど戸口が見えず、

強い一蹴りでたちまち中へ。

アンドロニコスは彼を見て、姿を現し声をかける。  
(四五)

馬から降りるよう彼に言い、問いかけること二度三度、

「小僧、お前は何者か、

どの一族、誰の裔、誰の子か。」

「三度の誓いを聞くまでは馬から降りぬ。」

「我が剣を携えてなら、誓ってやろう。」  
(五〇)

「汝が剣を携えるなら、我も剣を手にしよう。」

「我が槍を携えてなら、誓ってやろう。」

「汝が槍を携えるなら、我も槍を手にしよう。」

「腰に帯びたる両刃の剣に誓って、

汝に手をかけるなら、これにて我が胸貫かん。」  
(五五)

息子は少し身を屈め、黒馬より降りた。

そこで父は尋ねる、相手が何者か、

どの一族、誰の裔、誰の子か。

息子は答えて事を初めより物語る。

「サラセン人が襲来し、アラビヤ人が襲来する。…  
(六〇)

三度の誓いを聞くまでは、馬から降りてはなりません。」

アンドロニコスは彼を見て、涙にかきくれ、  
(二〇〇)

両手を上げて神を讃える、

「慈悲深き神よ、我は汝を讃えん、二度三度。

我は孤独な鷹なりしが、いまや息子の鷹を得た。」

### 註

\* 「」は校訂者アレクシウが後代の挿入と考える箇所。

(六三三) 写本の「平野へ降りる」と「山に上る」の位置をア

レクシウは逆にしている。なお「平野へ降りる」は腕試しの

ために試合場へ行く際の定型表現。

(三二七) 原文 Pakturapod。一カンダロンは約五七キロ。

(三五) Pajator 「ローマの」すなわち「ビザンツ帝国の」。

(四三)アレクシウは写本の「S」を「P」Sと改訂する。訳もそれに従う。

(六〇一九) 一一四〇行の繰り返し。

(二〇三)アレクシウは写本の δυο εφ'ετρα [「二羽の鷹」]を γιο εφ'ετρα [「息子の鷹」]と改訂する。この詩には一人の息子しかあらわれず、その方が話の筋には合う。「解説」で述べるようにポンドスやキプロスの版では二人の息子が出てくるので、写本はそれに影響されているのではないか、とアレクシウは推論している。

## 解説

### アクリテイカ歌謡

七世紀から十一世紀にかけてビザンツ帝国はその東方のサラセン人と勢力を争っていた。そこで生じたであろう戦闘、一騎討ち、略奪、逃亡、家族の別離、再会などの出来事は民衆の文学作品に素材を提供することになる。ビザンツの民衆文学はすなわち古典文化の高度な素養がなくても解することの出来る言語作品であり、十二世紀頃から特に詩の形で開花していく。その最大の成果は叙事ロマンス「デイゲニス・アクリテイス」であろう。これはビザンツ帝国の辺境地に襲来

したサラセン人の太守が、略奪した將軍の娘に恋をし、キリスト教に改宗して彼女と結婚する前半とその息子「デイゲニス・アクリテイス」(「帝国辺境の守備兵」の意)の夢想的な冒険を描く後半とからなる。「デイゲニス・アクリテイス」は四八〇行から一九〇〇行ほど(版によつて長さが異なる)の作品であるが、これ以外にもビザンツ・サラセン間の争いから素材を得、辺境の武人英雄を主人公とする短い詩が存在する。「アルムリスの歌」「ポルフィリス」「テオフィラクトス」、それに先に訳した「アンドロニコスの息子」などである。これら「アクリテイカ歌謡」のあるものはビザンツ後期からポスト・ビザンツ期の写本で伝わっている。例えば「デイゲニス・アクリテイス」の最も古い版の写本は十四世紀、「アルムリスの歌」は十五世紀、「アンドロニコスの息子」は十七世紀に属する。しかし、他のものは口承によつて現代にまで伝えられており、十九世紀の終わりから二十世紀にかけて収集整理され、出版された。

ビザンツ帝国辺境での出来事を描いたこれらの作品群は「アクリテイスの環 *Ακρική κωνσταντινών*」と呼ばれることもあるが、全てが相互に有機的な関連を示しているというわけではない。むしろ「花嫁の略奪」「築城」「竜との格闘」「主人公の死」といった類似のテーマが繰り返し現れるという点で

まとまつたジャンルを構成していると見られる。「デイゲニス」と「アンドロニコスの息子」間の関連も登場人物が共通しているからではなく、語られるエピソードの類似によるものである。

短いアクリティカ歌謡と叙事ロマンス「デイゲニス・アクリティス」との関係については十分に解決されているわけではない。以前は短い歌謡が綴り合わされて叙事ロマンスが作られたと考えられた。逆に短い詩のいくつかは叙事ロマンスから派生したと想定する人もいる。これらはいずれも、短い歌謡と叙事ロマンスの一方が他方から派生したという前提に基づいている。他方、これとは異なる発想のビートンの説では、歌謡と叙事ロマンスとの関連はそれほど強くはなく、類似が見られる場合は両者が共通の素材・定型表現を利用したからに過ぎない (Barton, 1981)。

これらのアクリティカ歌謡が実際どのようなように朗唱されていたのかについて詳しいことは分からない。同時代人の証言としてはカエサレアの主教アレタス (八五〇—九三二) の注釈がよく引かれる。

呪われしパフラゴニア人、栄光ある勇士たちの武勲の歌 (échos) を作り、オポロス銭を求めて家々を歌い歩く。

これ以外に続テオファネス年代記やニケフォロス・グリゴラ

スの歴史書に断片的な言及が見られるに過ぎない。

「アンドロニコスの息子」を初めアクリティカ歌謡の韻律は「十五音節詩 *dekatevraúvagos otixos, political verse*」と呼ばれるものである。これは音節の長短に關係なく、一行が八音節十七音節の計十五音節から成り、基本的には偶数音節にアクセントが来るイアンボス (弱強格) である。特に第四、六、八、十二音節にはアクセントが来るのが非常に多く、第十四音節には必ずアクセントが置かれる。したがって、各行は弱強弱で終わる。音節を×で、アクセントのある音節を\*で示すと、一行は次のようになる。

x x x x x x x x x x x x x x x

例えば「アンドロニコスの息子」の一行目では第二、八、十四音節にアクセントが置かれている。

*Koupeúov ou Zapaktivoi, koupeúov ou Apagrites,*

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

ビザンツ民衆文学の大部分はこの詩形で書かれている。それだけに異なる作品でも応用して使える定型表現が多い。民衆詩の定型表現については、ジェフリーズによる詳細な統計的研究がある (Jeffreys, 1973)。

## 「アンドロニコスの息子」

全体で一〇三行の小品であり、しかも六〇―九七行は一四〇行の繰り返しである。内容は敵の襲来、略奪、主人公の誕生と成長、腕試し、父との再会といった他のアクリティカ歌謡と類似したテーマの組み合わせから成っている。

冒頭、サラセン人が襲来してアンドロニコスの奥方を略奪する。ヒロインの略奪は民衆詩によく歌われるテーマであり、デイゲニス・アクリティスの母親も太守アマールによってロマニア（ビザンツ帝国）から略奪され、デイゲニス自身も自らの伴侶となるべき人を（相手の同意の上でだが）ある將軍の館から奪って逃げる。

続いて、アンドロニコスの息子がサラセン太守の牢獄で生まれ、太守の奥方の同情（わが子のよくに愛でる！）を受けながら成長し、サラセン人と腕試しをする。英雄の驚異的な成長ぶりはアクリティカ民謡や他の民衆文学お気に入りテーマである。「ポルフィリス」では主人公が生後一日目にピスケット、二日目にパンを丸ごと、五日目にパン籠一つ分を食べ、三十日目には外に出て豪語する。デイゲニスも十二歳の時には狩りに出て、熊やライオンを倒す。

馬跳びは「デイゲニス・アクリティス」の一場面を思い出させる。ここでは敵がデイゲニスの追撃に出る際、

サラセン人のスタレスなる者、離れた持ち場から、

八つの天幕、十八の矢来、四十頭の驛馬を跳び越えて、  
自分の馬に跳び乗った。(Ed. Aetion, 1985, II, 928-30)

類似のスポーツはビザンツの軍隊生活に実在したらしい。ヨハネス・スキュリツェス（十一世紀後半）の年代記はヨハネス・ツィミスケス帝（九六九―七六）の特長を叙述する箇所  
で次のように語る。

四頭の馬を一列に並べ、鳥のように一方の端から跳んで  
向こう端の馬に跳び乗った。(Ed. Thurn, p. 313, II:357)

最後に、息子は父アンドロニコスを探しにロマニアへ出かけ、再会を果たす。別れた父子の再会は例えば「アルムリスの歌」でも中心テーマである。ただし、ここでは父の方が太守アマールに囚われており、息子はサラセン人と戦いながら再会を果たすことになっている。

## 「アンドロニコスの息子」の他の版

「アンドロニコスの息子」の文体は非常に簡潔で飛躍的であるが、その分エピソードの繋がりが短絡的で理解しにくいことがある。アンドロニコスの息子に対する太守の奥方の同情、息子の豪語の中に現れる三人の人名など唐突である。これに比べると「アンドロニコスの息子」の他の版では、いろ

いろいろな説明がつけ加えられ、理解しやすくなっている。例えば、キプロス版では、母と太守の奥方の心情が挿入される。

母は息子にパンと乳を与える、

はやく大きくなるように、父も望んでいる通り。

太守の奥方はパンと蜜を与える、

はやく大きくなるように、そしてムスリムになるように。

(Καλονόσος 1970:210)

ポンドス版では一人称物語になる。

トルコ人が都に、ロマニアに來襲し、

教会を蹂躪し、聖画に黄金の十字架、

銀の杯を奪い去り、

我が母を略奪した、身ごもりしその時に。

(Ακαδημία Αθηνών 1962:61-3)

ポンドス版ではその後太守アリーの宮殿で主人公が生まれるが、母は彼をあやしむながら囁きかける。

息子よ、生き延びるなら、ロマニアに逃げて行け、

そこには父アンドロニコスと良き兄クサンシノスがいる。

このように、この版では主人公に兄弟クサンシノス(＝コンスタンティノス)がいることが明らかにされる。やがて主人公(名前は語られず、ただ捕囚 *αχιδαιτος* とだけ呼ばれる)は夜間牢獄を脱し、ロマニアへ向かう途中、父と兄に出会う。

父の方は眠っており、見張りをしている兄に挨拶するが返礼がないので争いとなる。戦いの音を聞いて父が目覚め、相手の素性を尋ねる。捕囚は答えて(三度の誓いは現れない)、詩の最初の部分が簡潔に繰り返される。父は相手の正体を悟り、神に祈る。

幼かった私は年老いた。かつては二羽の鷹がいなかったけれど、老いた今、二羽の鷹を得た。

その後も話が続き、アリー率いる部隊が現れるが、兄弟と父はこれを打ち破る。

### 「アンドロニコスの息子」とアクリティカ歌謡

「アンドロニコスの息子」はサラセン人による將軍の娘の略奪、主人公の驚異的な成長といったエピソードが共通する点で「ティゲニス・アクリティス」と関係を持つている。が、それ以上に明らかな関連が見られるのはアクリティカ歌謡のうちの「ポルフィリス」である。これにも様々な版がありエピソードが異なるのだが、Kupatkins (1926:129-131) 所収のポンドス版ではあらずじは次のようである。

主人公ポルフィリスはアンドロニコスの息子同様、驚異的な成長を遂げ、三十日目には外に出て豪語する。

俺は乙女に恋をした、皇帝の娘に：：

俺は恐れはせぬ、バルナスにニケフォロス、  
前へ後ろへ剣を切るバリユトラケロスだろうと。

怒った皇帝は彼を捕らえるべく軍隊を派遣する。彼らはポル  
フィリスが眠っているところを襲い、

彼をしっかりと縛り上げ、二重の鉄鎖を掛け、

彼の目を、九つの絹糸で縫い合わせた。

コンスタンチノープルへ連行されたポルフィリスを見て皇帝  
の娘は慰めの言葉を掛ける。と、ポルフィリスは奮起して、

脚を動かすと、縄は解かれ、

手を振るうと、鎖は破れた。

鎖の破片を振り回して、何千何万の皇帝の部隊を打ち倒す。

このように「ポルフィリス」では、三人の勇者を恐れない、  
という豪語や鎖を自ら解き放つエピソードが「アンドロニコ  
スの息子」よりも有機的に筋と結びついている。そこで、ア  
レクシウはこれらのエピソードが「ポルフィリス」から「ア  
ンドロニコスの息子」に流れ込んだものと考えている。

史的背景　ドゥーカス父子と三人のフォカサー

「アンドロニコスの息子」や「デイゲニス・アクリテイス」  
が十世紀前後のビザンツ・サラセンの対立を背景にしている  
ことは作品内容から明らかであるが、さらに進んで、これを

特定の歴史的事件・人物を結びつけようとする試みが従来か  
らなされてきた。「アンドロニコスの息子」の場合、その鍵  
を与えるのは主人公の父アンドロニコスの名と、主人公が自  
らの剛勇を豪語する中で言及される三人の武人の名である。

古くはこのアンドロニコスが波乱に満ちた生涯で知られる  
十二世紀の皇帝アンドロニコス・コムネノス（一一八三―一  
一五）と同定されたこともあるが、むしろ十世紀の有名な軍人  
親子アンドロニコス・ドゥーカスとコンスタンティノスがモ  
デルであろうと考える学者が多い。アンドロニコス・ドゥー  
カスは十世紀初めキリキアでアラビア軍を打ち破った有能な  
將軍だったが反乱を起こし、後にバグダッドへ逃亡する。父  
は捕囚のまま没する（九一〇年頃）が、息子コンスタンティ  
ノスはサラセン人の許を逃れ、ビザンツ帝国に帰還する。皇  
帝レオン六世の死後、後継者コンスタンティノス（後の七世）  
に対向して王位を狙うが破れ、その一族とともに滅ぶ（九一  
三年）。このようなドゥーカス父子の武勇は同時代人の間で  
伝説化していったらしい。ミカエル・プセロス（一一〇一―  
八一頃）の年代記は、十一世紀の皇帝の家柄の良さについて、

〔皇帝コンスタンティノス十世ドゥーカス（一〇五九―一

七）の〕一族は曾祖父に至るまで栄えある富裕な家系で  
あり、歴史もそのように彼らを讃える。かのアンドロニ

コスと息子コンスタンティノス…の名を今日なお誰もが口にする。(Ed. Renauld, p. 140)

と述べている。

ただし「アンドロニコスの息子」はこういった史実にある程度基づくにしろ、いくつかの変更を受けている。アラビア人に捕らえられているのはアンドロニコスとその一族ではなく、彼の妻と息子の方である。また、主人公である息子の名が語られることはない。他の版ではコンスタンティノスの名が言及されるが、主人公自身ではなく、彼の兄弟の名になっている。

もう一つの史実との繋がりには主人公が大言壮語する中に出てくる三人の勇者の名である。しかしながら、このように英雄が三人まとめて歌謡で歌われる例というのは数多くあり、しかもその際、三人の名前は実に様々な形で現れる。Pujalos (1979:56)によれば、三人の名の最も古い形は「バルダス・フォカス」「ニケフォロス」「大地と世を震わせるトレモトラケロス(「震える首の」)」であるという。また、三人は「アンドロニコスの息子」や「ポルフィリス」のように主人公が恐れない相手として引用される場合もあるが、他の歌謡では、人食い蟹に食べられた勇士の名として、あるいは、ある乙女

を見初めた主人公が派遣する仲人の名としても現れることもある。この中では「アンドロニコスの息子」「ポルフィリス」での使われ方が英雄の名にはふさわしいようである。

グレゴワール (Grégoire 1942:29-33) はこの三人を皇帝ニケフォロス二世フォカス(九六三—六九)の甥バルダス・フォカス、その兄弟ニケフォロス、バルダスの息子ニケフォロス(アラビア、アルメニアの史料では「震える首の」ではなく「曲がった首の」と呼ばれる)と同定した。これに対しアレクシウ (Alexiou 1990:185-6) は皇帝ニケフォロス二世の父バルダスと皇帝自身であると考える(三人目の名前については判断を保留)。こういった史実との同定は、作品の鑑賞に必ずしも必要というわけではなからうが、作品の成立については何らかの鍵を与えてくれる。かくしてアレクシウはこれらの歴史的言及に基づき、「アンドロニコスの息子」の成立を次のように推測する。成立はおそらく十世紀の初め(コンスタンティノス・ドゥーカスの反乱とその死以前)、カッパドキアにおいてであろう。そしてそこよりポンドスや他の小アジア地方に伝わり、さらにキプロスや他のエーゲ海の島々に広がった(これらの地方には「アンドロニコスの息子」の様々な版が伝承されている)。さらに時間の経過とともに、二番目の兄弟コンスタンティノスとその死、兄弟の和解、都の陥落、



トルコ人、といった新しい要素が加わえられていき、諸版の間で多様性を示すに至った。

### 出版史とテキスト

「アンドロニコスの息子」は一八五九年、「再会」Haryvouris のタイトルで, Στυπιδιώ Ζαμπρέλος により公刊された。ザベリオスによれば Wladimir Brunet de Presle が所有していた写本を写したものが、校訂者の恣意的な修正や追加を含んでいる。その後 Theodor Kind, Max Büdinger, Wilhelm Wagner 等が出版したもののザベリオス刊本だった。これに対して一八七〇年及び一八七四年、高名な現代ギリシヤ文献学者 Emilie Legrand はブリュネの写本を忠実に公刊した (Κηρυκίδης, 1926 や Grégoire, 1942 もルグランのこの刊本から再録)。ルグランはその序論の中でブリュネのテキストは彼の教授の Charles-Benoît Hase が現代東洋語学校の授業で伝えたものであることを明らかにした。(Hase 自身はこのテキストをどこから得たのか示していない)。その後ルグランは文献学者 Jean-Baptiste de Villosion が一七八〇年代にエーゲ海で収集した民謡の中に (キプロス方言の要素を含む) 別の版を発見した (一九〇四年死後出版)。同じ年、ギリシヤ人文学者 Nikos Béns も別の写本 (一八一―一九世紀のもの

ので、タイトルは「アンドロニコスの息子 Το Ανδροικό-τρουλο」) をモネンヴァシマで発見、出版した。

翻訳には Alexiou (1990: 188-190) を使用した。アレクシウのテキストはルグランの一八七四年の刊本に基づいている。なお, Sahas & Legrand (1875:47-8) や Grégoire (1933:55-7) の仏訳も参考にした。

### 参考文献

- Ακάρηματα Αθηνών (1962). *Ελληνικά δημοτικά τραγούδια* (Εκλογή), Τομ. Α'. Αθήνα.
- Αλεξίου, Στ. (1985). *Βασιλειος Διγενής Ακρίτης (κατά το χειρόγραφο του Εσφοριά) και το Άσμα του Αημούλην, Κριτική Έκδοση, Εισαγωγή, Δημειώσεις, Γλωσσάριο*. Αθήνα: Εφημής (Φυλολογική Βιβλιοθήκη 51).
- \_\_\_\_\_. (1990). *Βασιλειος Διγενής Ακρίτης και Τα δόγματα του Αημούλην και του Γιού του Ανδροϊκού*. Αθήνα:Εφημής.
- Beck, H.G. (1971). *Geschichte der byzantinischen Volksliteratur*. München: C.H.Beck.
- Beaton, R. (1981). 'Digenes Akrites' and modern Greek folk song: a reassessment. *Byzantion* 51, 22-43.

- Grégoire, H. (1933). Études sur l'épopée Byzantine. *Revue des Etudes Grecques* 46, 29-69.
- (1942). *Ο Διγενής Ακρίτας*. New York.
- Jeffreys, M. J. (1973). Formulas in the *Chronicle of the Morea*. *Dumbarton Oaks Papers* 27, 163-195.
- Καλούραρος, Π. (1941: rpt. 1970). *Βασιλείος Διγενής Ακρίτας*. Β. Αθήνα.
- Κυριακίδης, Στ. (1926). *Ο Διγενής Ακρίτας, ακριτικά έπη, ακριτικά τραγούδια, ακριτική ζωή*. Αθήνα [Σύλλογος προς διάδοσιν ωφελίμων Βιβλίων 45]
- Μαστροδημήτρης, Π. (1984). *Το δημοτικό τραγούδι*. Αθήνα: Ίδρυμα Γουλαυδής-Χορν.
- Μητροδάκης, Κ. (1986). *Εισαγωγή στη Νέα Ελληνική λογοτεχνία*. Αθήνα.
- Ρωμιάος, Κ. (1979) Τρεις Βυζαντινοί άρχοντες στα σημερινά δημοτικά τραγούδια. *Τραγούδια του Ακριτικού κύκλου*, σσ. 56-76. [= Τρεις Βυζαντινοί άρχοντες. Πεπραγμένα 9ου Διεθνούς Βυζαντινολογικού Συνεδρίου, Θεσσαλονίκη, 1953, τομ. 3, σσ. 25-45]
- Sathas, C. & Legrand, É. (1875). *Les exploits de Digénis Akritas, d'après le manuscrit unique de Trébizonde*. Paris.